

## 伯爵の釵

泉鏡花作

一

此のものの語の起つた土地は、清きと、美しきと、  
二筋の大川、市の兩端を流れ、眞中央に城の天守尚  
ほ高く聳え、森黒く、濠蒼く、國境の山岳は重疊と  
して、湖を包み、海に沿ひ、橋と、坂と、辻の柳、  
薨の浪の町を抱いた、北國の都である。

一年、激しい旱魃のあつた眞夏の事。

……と言ふと忽ち、天に可恐しき入道雲湧き、  
地に水論の修羅の巷の流れたやうに聞えるけれど、  
決して、そんな、物騒な沙汰ではない。

恚る折から、地方巡業の新劇團、女優を主とした  
帝都の有名なる大一座が、此の土地に七日間の興行  
して、全市の湧くが如き人氣を博した。

極暑の、早と言ふのに、たとひ如何なる人氣にせよ、湧くの、煮えるのなどは、口にするも暑くるしい。が、——諺に、火事の折から土藏の焼けるのを防ぐのに、大盃に満々と水を湛へ、蠟燭に灯を點じたのを其の中に立て、目塗をすると、壁を透して煙が裡へ漲つても、火氣を呼ばないで安全だと言ふ。……火を以て火を制するのださうである。

こゝに女優たちの、近代的情熱の燃ゆるが如き演劇は、恰も此の轍だ、と稱へて可い。雲は焚け、草は萎み、水は涸れ、人は喘ぐ時、一座の劇は宛然褥熱に對する氷の如く、十萬の市民に、一劑、清涼の氣を齎らして剩餘あつた。

膚の白さも雪なれば、瞳も露の涼しい中にも、擧つて座中の明星と稱へられた村井紫玉が、

「まあ……前刻の、あの、小さな兒は？」  
公園の茶店に、一人靜に憩ひながら、緋鹽瀬の煙管筒の結目を解掛けつゝ、偶と思つた。……



妙なる音楽、と聞えて、其の都度、ハツと隠れ忍んで、微笑み／＼通ると思へ。

深張の涼傘の影ながら、尚ほ面影は透き、色香は仄めく・・・心地すれば、誰憚るともなく自然から俯目に俯向く。謙讓の褻はづれは、倨傲の襟より品を備へて、尋常な姿容は調つて、焼地に焦りつく影も、水で描いたやうに涼しくも清爽であつた。

僅少に疊の縁ばかりの、日影を選んで辿るのも、人は目を三つて、鯨に乗つて人魚が通ると見たであらう。・・・素足の白のが、すら／＼と黒繻子の上を・・・辻れば、溝の流も清水の音信。で、眞先に志したのは、城の櫓と境を接した、三つ二つ、全国に指を屈すると云ふ、景勝の公園であつた。

公園の入口に、樹林を背戸に、蓮池を庭に、柳、藤、櫻、山吹など、飛々に名に呼ばれた茶店がある。

紫玉が、いま腰を掛けたのは柳の茶屋と言ふのであつた。が、紅い襷で、色白な娘が運んだ、煎茶と煙草盆を袖に控へて、然まで嗜むともない、其の、伊達に持った煙草入を手にした時、――

「……あれは女の兒だつたか知ら、其とも男の兒だつたらうかね。」

――と思ひ出したのは其である。――

で、華奢造りの黄金煙管で、餘り馴れない、些と覺束ない手つきして、青磁色の手つきの瀬戸火鉢を探りながら、

「……帽子を……被つて居たとすれば、男の兒だらうが、青い鉢巻だつて……。……麥藁に巻いた切だつたらうか、其ともリボンが知ら。色は判然覺えて居るけど、……お待ちよ、

「と恚うだから。 . . . .」

取つて着けたやうな喫み方だから、見ると、もの／＼しいまでに、打傾いて一口吸つて、

「 . . . . 年紀は、然うさね、七歳か六歳ぐらゐな、色の白い上品な、 . . . . 男の兒にしては些と綺麗過ぎるから女の兒 . . . . だとりボンだね。 . . . . 青いリボン。 . . . . 幼稚くたつて緋と限りもしないわね。では、矢張り女の兒か知ら。それにしては麥藁帽子 . . . . 尤もおさげに結つてれば . . . . だけど、其處までは氣が付かない。 . . . .」

大通りは一筋だが、道に迷ふのも一興で、其處ともなく、裏小路へ紛れ込んで、低い土塀から瓜、茄子の畠の覗かれる、荒れ寂れた邸町を一人で通つて、まるつ切人に行合はず。白熱した日盛に、よくも羽が焦げないと思ふ、白い蝶々の、不意にスツと来て、翻々と擦違ふのを、吃驚した顔をして見送つて、そして莞爾 . . . . したり . . . . 然うした時は

象牙骨の扇で一寸招いて見たり。……土塀の崩屋根を仰いで血のやうな百日紅の咲満ちた枝を、涼傘の尖で撥ぐる、と堪らない。とぶる／＼ゆさ／＼と行るのに、「御免なさい。」と言つて見たり。石垣の草蒸に、棄てゝある瓜の皮が、化けて脚が生えて、むく／＼と動出しさうなのに、「あれ。」と飛退いたり。取留めないすさびも、此の女の人氣なれば、話せば逸話に傳へられよう。

低い山かと思つた、樹立の繁つた高い公園の下へ出ると、坂の上りに社があつた。

宮も大きく、境内も廣かつた。が、砂濱に鳥居を立てたやうで、拜殿の裏庭には鬱々たる其の公園の森を負ひながら、廣前は一面、眞空なる太陽に、礫の影一つなく、唯白紙を敷詰めた光景なのが、日射に、やゝ黄んで、渺として、何處から散つたか、百日紅の二三點。

……覗くと、静まり返つた正面の階の傍に、紅の手綱、朱の鞍置いた、つくりものゝ白の神馬が

菽萁として一頭立つ。横に公園へ上る坂は、見透しに成つて居たから、涼傘のまゝスツと鳥居から抜けると、紫玉の姿は色のまゝ鳥居の柱に映つて通る。．．．其處に屋根圍した、大なる石の御手洗があつて、青き龍頭から湛へた水は、且つすら／＼と玉を亂して、颯と簾に噴溢れる。其手水鉢の周圍に、唯一人．．．其の稚兒が居たのであつた。

——が、炎天、人影も絶えた折から、父母の晝睡の夢を抜出した、．．．神官の兒であらうと紫玉は視た。ちら／＼廻りつゝ、廻りつゝ、彼方此方する。．．．

唯、御手洗は高く、稚兒は小さいので、下を傳うてまはりを廻るのが、宛然、石に刻んだ形が、噴溢る水の影に誘はれて、すら／＼と動くやうな。．．．と視るうちに、稚兒は伸上り、伸上つては、いたいけな手を空に、すらりと動いて、伸上つては、又空に手を伸ばす。——

紫玉はズツと寄つた。稚兒は最う涼傘の陰に入つたのである。

「一寸……何をして居るの。」

「水が欲しいの。」

と、あどけなく言つた。

あゝ、其がため足場を取つては、取替へては、手を伸ばす、が爪立つても、青い巾を巻いた、其の振分髪、まろが丈は……筒井筒其の半にも届くまい。

其の御手洗の高い縁に乗つて居る柄杓を、取りたい、と又稚兒が然う言つた。

紫玉は思はず微笑んで、

「あら、恚うすれば仔細はないよ。」

と、半身を斜めにして、溢れかゝる水の一筋を、玉の霽に、颯と散らして、赤く燃ゆるやうな唇に請けた。ちやうど渴いても居たし、水の潔い事を見たのは言ふまでもない。

「ねえ、お前。」

稚兒が仰いで、熟と紫玉を視て、

「手を淨める水だもの。」

直接に吻を接るのは不作法だ、と咎めたやうに聞えたのである。

劇壇の女王は、氣色した。

「いやにお茶がつてるよ、生意氣な。」と、軽く其の頭を掌で叩き放しに、衝と廣前を切れて、坂

に出て、見返りもしないで、切てやがて此の茶屋に憩つたのであつた。――

今思ふと、手を觸れた稚兒の頭も、女か、男か、不思議に其の感覺が残らぬ。氣は涼しかつたが、暑さに、幾干かとしたものかも知れない。

「娘さん、町から、此の坂を上る處に、お宮がありますわね。」

「はい。」

「何と言ふ、お社です。」

「浦安神社でございますわ。」と、片手を疊に、娘は行儀正しく答へた。

「何神様が祭つてあります？」

「お父さん、お父さん。」と娘が、つい傍に、蓮池に向いて、（じんべ）と言ふ膝ぎりの帷子で、眼鏡の下に内職らしい網をすいて居る半白の父を呼ぶと、急いで眼鏡を外して、コッソと水牛の柄を疊んで、臺に乗せて、其から向直つて、丁寧に辭儀をして、

「え、浦安様は、浦安かれとの、其の御守護ぢやさうにござりまして。水をばお司りなされませぬ、龍神と申すことにござります。これの、太夫様にお茶を替へて上げぬかい。」

紫玉は我知らず衣紋が締つた。……稱へかたは相應はぬにもせよ、拙な山水畫の裡の隱者めいた老人までが、確か自分を知つて居る。

心着けば、正面神棚の下には、我が姿、昨夜も扮した、劇中女主人公の王妃なる、玉の鳳凰の如きが掲げてあつた。

「そして、……」  
「聲も朗かに、且つ淑ましく、  
「龍神だと、女神ですか、男神ですか。」  
「さ、さ。」と老人は膝を刻んで、恰も此の問を待構へたやうに。

「其の儀は、とかくに申しますが、如何か、孰れとも相分りませぬ。此の公園のづゝと奥に、眞暗

な巖窟の中に、一ヶ處清水の湧く井戸がござります。  
古色の夥しい青銅の龍が蟠つて、井桁に蓋をして居  
りまして、金網を張り、みだりに近づいては成りま  
せぬが、靈澤金水と申して、此がために此の市の名  
が起りましたと申します。此が奥の院と申す事で、  
え、貴方様が御意の浦安神社は、其の前殿と申す  
事でござります。御參詣を遊ばしましたか。」

「あ、否。」と言つたが、すぐ又稚兒の事が胸  
に浮んだ。それなり一時言葉が途絶える。

森々たる日中の樹林、濃く黒く森に包まれて城の  
天守は前に聳ゆる。茶店の横にも、見上るばかりの  
槐榎の暗い影が樅楓を薄く交へて、藍緑の流に群青  
の瀬のある如き、たら／＼上りの徑がある。瀧かと  
思ふ蝉時雨。光る雨、輝く木の葉、此の炎天の下蔭  
は、恰も稻妻に籠る穴に似て、もの凄いまで寂寞し  
た。

木下闇、其の横徑の中途に、空屋かと思ふ、廂の  
朽ちた、誰も居ない店がある。・・・

#### 四

鎖してはないものゝ、奥に人が居て住むかさへ疑  
はしい。其とも日が暮れると、白い首でも出て些と  
は客が寄らうも知れぬ。店一杯に雛壇のやうな臺を  
置いて、最ど薄暗いのに、三方を黒布で張廻した、  
壇の附元に、流星の髑髏、乾びた蛾に似たものを、  
點々並べたのは的である。地方の盛場には時々見掛  
ける、吹矢の機關とは一目視て紫玉にも分つた。

實は——吹矢も、化ものと名のついたので、  
幽霊の廂合の幕から倒にぶら下り、見越入道は詔へ  
た穴から又ツと出る。拵への黒堀に薄り立ち、産女  
鳥は石地藏と並んで悄乎々々。一ツ目小僧の豆腐買  
は、流灌頂の野川の縁を、大笠を俯向けて、跣足で  
ちよこ／＼と巧みに歩行くなど、仕掛ものに成つて  
居る。……如何はしいが、生霊と札の立つた  
就中小さな的に吹當てると、床板がぐわらりと轉覆  
つて、大松茸を抱いた緋の禪のおかめが、とんぼ返  
りをして莞爾と飛出す、途端に、四方へ引張つた綱

が揺れて、鐘と太鼓が、しだらでんで一齊にぐわん  
／＼、どんどと鳴つて、其で市が榮えた、店なので  
あるが、一ツ目小僧のつたひ歩行く波張が切々に、  
藪畳は打倒れ、飾の石地藏は仰向けに反つて、視た  
處、ものあはれなまで寂れて居た。

―― 其の軒の土間に、背後むきに蹲んだ僧形の  
ものがある。坊主であらう。墨染の麻の法衣の破れ  
／＼な形で、鬱金も最う鼠に汚れた布に――す  
ぐ、分つたが、――三味線を一挺、盲目の琵琶は  
背負に背負つて居る、漂泊ふ門附の類であらう。

何をか働く。人目を避けて、蹲つて、虱を捻るか、  
瘡を搔くか、辨當を使ふとも、掃溜を探した干魚の  
骨を舐るに過ぎまい。乞食のやうに薄汚い。

紫玉は敗竄した藝人と、荒涼たる見世ものに對し  
て、深い歎息を漏らした。且つあはれみ、且つ可忌  
しがつたのである。

灰吹に薄い唾した。

此の世盛りの、思ひ上れる、美しき女優は、樹の  
緑蟬の聲も滴るが如き影に、框も自然から浮いて高  
い處に、色も濡々と水際立つ、紫陽花の花の姿を撓  
わに置きつゝ、翡翠、紅玉、眞珠など、指環を三つ  
四つ嵌めた白い指をツト擧げて、鬢の後毛を搔いた  
次手に、白金の高彫の、翼に金剛石を鑲め、目には  
血隨玉、嘴と爪に綠寶玉の象嵌した、白く輝く鸚鵡  
の釵―― 何其の伯爵が心を籠めた贈ものとして、  
人は知つて、（伯爵）と稱ふる其の釵を抜いて、  
脚を返して、喫掛けた火皿の脂を浚つた。・・・  
伊達の煙管は、煙を吸ふより、手すさみの科が多い  
慣習である。

三味線背負つた乞食坊主が、引搔くやうにもぞ／  
＼と肩を揺ると、一眼ひたと盲ひた、眇の青ぶくれ  
の面を向けて、恚う、引傾つて、熟と紫玉の其の状  
を視ると、肩を抜いた杖の尖が、一度胸へ引込んで、  
前屈みに、よたりと立つた。

杖を徑に突立て／＼、辿々しく下間を蠢いて下り  
て、城の方へ去るかと思へば、のろ／＼後退をしな

から、茶店に向つて、吻と、立直つて一息吐く。

紫玉の眉の顰む時、五間ばかり軒を離れた、其處で早や、此方へぐつたりと叩頭をする。

知らない振して、目をそらして、紫玉が釵に俯向いた。が、濃い睫毛の重く成るまで、坊主の影は近いたのである。

「太夫様。」

ハツと顔を上げると、坊主は既に敷居を越えて、目前の土間に、兩膝を折つて居た。

「お願いでございます。……お慈悲ぢや、お慈悲、お慈悲。」

假初に置いた涼傘が、襪褌法衣の袖に觸れさうなので、密と手元へ引いて、

「何ですか。」と、坊主は視ないで、茶屋の父娘に目を遣つた。

視<sup>み</sup>て居<sup>ゐ</sup>る。  
立<sup>た</sup>つて聲<sup>こゑ</sup>を掛<sup>か</sup>けて追<sup>お</sup>はうともせず、  
父<sup>ちち</sup>も娘<sup>むすめ</sup>も静<sup>しずか</sup>に

五

少時しばちくすると、此この早ひでりに水みづは涸かれたが、碧緑へきりよくの葉はの深くふか繁しげれる中なかなる、緋葉もみぢの瀧たきと云いふのに對たいして、紫しぎ玉よくは蓮池はすいけの汀みきはを歩ある行あるいて居あた。こゝに別べつに瀧たきの四阿あつまやと稱となふるのがあつて、八ツ橋はしを掛かけ、飛石とびいしを置あいて、枝折戸しをりどを鎖かぎさぬのである。

で、瀧たきのある位置あちは、柳やなぎの茶屋ちやんからだ、もとの道みちへ小戻りこもとする事ことに成なる。紫玉しぎよくはあの、吹矢ふきやの徑こみちから公園こうえんへ入はいらないで、引返ひきかへしたので、．．．．涼ひが傘さを投遣なげやりに翳かざしながら、袖そでを柔やわらかに、手首てくびをやゝ硬かたくして、彼處あそこで抜ぬいた白金プラチナの鸚鵡あうむの釵かんざし、其その翼つばさを一寸ちよつとつま抓とんで、晃乎きらりとぶら下さげて居あるのであるが。

仔細しさいは希有けうな、．．．．

坊主ぼんずが土下座どげざして「お慈悲じひ、お慈悲じひ。」で、お願ねがひと言いふのが金かねでも米こめでもない。施與ほどこしには違ちがひなけれど、變へんな事ことには「お禁厭まじなひをして遣つかはされい。蟲齒むしばが疚うづいて堪たへ難がたいでな。」

と、成程左の頬がぶくりとうだばれたのを、堪難い状に掌で抱へて、首を引傾けた同じ方の一眼が白くどろんどろんとして潰れて居る。其の目からも、ぶよぶよとした唇からも、汚い液が垂れさうな鹽梅。

「慈悲ぢや。」と更に拜んで、「手足に五寸釘を打たれうとても、恚までの苦惱はございますまいぞ、お情ぢや、禁厭うて遣はされ。」で、禁厭とは別儀でない。――其の紫玉が手にした白金の釵を、齒のうろへ挿入て欲しいのだと言ふ。

「太夫様お手づから。……龍と蛞蝓ほど違ひましても、生あるうちは私ぢやとて、藝人の端くれ。太夫様の御光明に照らされますだけでも、此の疚痛は忘れませう。」と、はツ／＼と息を吐く。……

既に、何人であるかを知られて、土に手をついて太夫様と言はれたのでは、其の所謂禁厭の斷り悪さは、金銭の無心をされたのと同じ事。――但し手から手へ渡すも恐れる……。落して釵を貸さう

とすると、「あゝ、いや、太夫様、お手づから。

・ ・ ・ ・ 貴女様の膚の移香、脈の響をお釵から傳へ受けたいのでござります。貴方様の御血脈、其が禁厭に成りますので、お手に釵の鳥をばお持ち遊ばされて、はい、はい、はい。」 あん、と口を開いた中へ、紫玉は止む事を得ず、手に持添へつゝ、釵の脚を挿入れた。

喘ぐわ、舐るわ！ 鼻息がむツと掛る。 堪らず袖を巻いて唇を蔽ひながら、勢ひ釵とゝもに、やゝ白やかな手の伸びるのが、雪白なる鷺鳥の七寶の瓔珞を掛けた風情なのを、無性髯で、チユツパと啜込むやうに、坊主は犬蹲に成つて、頤でうけて、どろりと嘗め込む。

唯、紫玉の手には、づぶ／＼と響いて、腐れた瓜を突刺す氣味合。

指環は緑紅の結晶したる玉の如き虹である。眩しかつたらう。坊主は閃いた目も閉ぢて、ニとした顔色で、しつきりもなしに、だら／＼と涎を垂らす。

「あゝ、手がだるい、まだ？」 「いま一息。」

不思議な光景は、美しき女が、針の尖で怪しき魔を操る、舞臺に於ける、神秘なる場面にも見えた。茶店の娘と其の父は、感に堪へた観客の如く、呼吸を殺して固唾を飲んだ。

「あゝ、お有難や、お有難い。トンと苦惱を忘れました。お有難い。」 と三味線包、がっかりと抜衣紋。で、兩掌を仰向け、低く紫玉の雪の爪尖を頂く眞似して、「恚やうに穢いものなれば、くど／＼お禮など申して、お身近は却つてお目觸り、御恩は忘れぬぞや。」 と胸を捻ぢるやうに杖で立つて、

「お有難や、有難や。あゝ、苦を忘れて腑が抜けた。もし、太夫様。」 と敷居を跨いで、蹠踉状に振りむいて、「あの、其のお釵に——」  
「え。」 と紫玉が鸚鵡を視る時、「齒くさが着いては居りませぬか。恐縮や。……え

ひょ。「とニヤリとして

「ちやつとお拭ふきななされませい。」  
此これがために、  
紫玉しぎよくは手てを掛かけた懐紙くわいしが、餘儀よぎなく一寸ちよつと逡巡ためらつた。

同時たうじに、あらぬ方かたに衝つと面おもてを背そむけた。

紫玉は待兼ねたやうに懷紙を重ねて、伯爵、を清めながら森の徑へ行きましたか、坊主は、と訊いた。父も娘も、へい、と言つて、大方然うだらうと言ふ。――最う影もなかつたのである。父娘は唯、紫玉の舉動にのみ氣を奪られて居たらう。……此の邊を歩行く門附見たいなもの、と又訊けば、父親がつひぞ見掛けた事はない。娘が跣足で居ましたと言つたので、旅から紛込んだものか、其も分らぬ。

と、言ふうちにも、紫玉は一寸々々眉を蹙めた。抜いて持った釵、鬢摺れに髪に返さうとすると、呀、する毎に、手の撓ふにさへ、得も言はれない、異なる、變な、惡臭い、堪らない、臭氣がしたのであるから。

城は公園を出る方で、其處にも影がないとすると、吹矢の道を上つたに相違ない。で、後へ續くには堪へられぬ。

其處で瀧の道を訊いて　――　此處へ來た。　――

泉殿せんてんに擬なぞらへた、飛とび々の亭ちんの執いつれかに、邯鄲かんたんの石いしの手水鉢てうづつばち、名品めいひん、と教をしへられたが、水みづの音おとより蝉せみの聲こゑで、勝手かつてに通とほりぬ抜けの出来できる茶屋ちやは、晝寐ひるねの半なかばらしい。何どの座敷ざしきも寂寞ひっそりして人氣ひとけもなかつた。

御齒おはくろとんぼ黒蜻蛉かが、鐵漿かねつけた女房にようぼの、微かすかな夢ゆめの影かげらしく、ひら／＼と一ひとつつ、葉はばかりの燕子花かきつばたを傳つたつて飛とぶのが、此このあたり御殿ごてん女中ぢよちゆうの逍遙せうえうした昔むかしの幻まぼろしを、寂さびしく描えがいて、都みやこを出でた日ひ、遠とほく來きた旅たびを思おもはせる。

すべて舊藩きうはん侯こうの庭園ていゑんだ、と言いふにつけても、贈主おくりぬしなる貴公子きこうしの面影おもかげさへ浮うかぶ、伯爵はくしやくの鸚鵡あうむを何なんとせう。

靈廟れいべうの土つちの瘡あすりを落おとし、秘符ひふの威徳ゑとくの鬼おにを追おふやう、立處たちどころに坊主ぼうずの蟲齒むしばを癒いやしたは然さることながら、路々みち／＼も惡臭わるくささの消きえないばかりか、口中こうちゆうの臭氣しゅうきは、次第しだいに持もつ手てを傳つたはつて、袖そでにも移うつりさうに思おもはれる。

紫玉しぎよくは、樹きの下したに涼傘ひがさを疊たんで、瀧たきを斜なめに視みつゝ、池いけの縁へりに低ひくく居あた。

灌は、早に爾く骨なりと雖も、巖には苔蒸し、壺は森を被いで蒼い。然も巖がくれの裏に、だうたふと落ちたぎる水の音の凄じく響くのは、大槌を伏せて二重に城の用水を引いた、敵に對する要害で、地下を城の内濠に灌ぐと聞く、戦國の餘殘ださうである。

紫玉は釵を洗つた。．．．．．艶なる女優の心を  
得た池の面は、萌黄の薄絹の如く波を伸べつゝ拭つて、清めるばかりに見えたのに、取つて黒髪に挿さうとすると、些と離れたくらゐでは、耳の邊へも寄せられぬ。鼻を衝いて、ツンと臭い。

「あ、」と聲を立てたほどである。

雫を切ると、雫まで芬と臭ふ。たとへば貴重なる香水の薫の一滴の散るやうに、洗へば洗ふほど流せば流すほど香が廣がる。．．．．．二三度、四五度、繰返すうちに、指にも、手にも、果は指環の緑碧紅黄の珠玉の數にも、言ひやうのない悪臭が蒸れ掛るやうに思はれたので。．．．．．

「えゝ。」

紫玉はスツと立つて、手のはずみで一振振つた。

「ぬしにお成りよ。」

白金の羽の散る状に、ちら／＼と映ると釵は瀧壺に眞蒼な水に、沈んで行く。・・・あはれ、呪はれたる仙禽よ。卿は、熱帯の鬱林に放たれずして、山地の碧潭に託されたのである。・・・ト此の奇異なる珍客を迎ふるか、不可思議の獲ものに競ふか、静なる池の面に、眠れる魚の如く縦横に横はつた、樹の枝々の影は、尾鱗を跳ねて、幾千ともなく、一時に皆揺動いた。」

此に悚然とした状に、一度すばめた袖を、はら／＼と翼の如く搏いたのは、紫玉が、可厭しき移香を拂ふと／＼もに、高貴なる鸚鵡を思ひ切つた、安からぬ胸の波動で、尚ほ且つ翻々とふるひながら、衝と飛退くやうに、瀧の下行く棧道の橋に退いた。

石の反橋である。巖と石の、いづれにも累れる牡丹の花の如きを、左右に築き上げた、銘を石橋と言ふ、反橋の石の眞中に立つて、吻と一息した紫玉は、

此この時とき、  
すらりと、  
背うしろも心こころも高たかかつた。

明眸めいぼうの左右さいうに樹立こだちが分わかれて、一條ひとすぢの大道だいだう、炎天えんてんの下もとに展ひらけつゝ、日盛ひざかりの町まちの大路おほぢが望のぞまれて、煉瓦造れんぐわつくりの>避雷針ひらいしん、古い白壁ふるしろかへ、寺てらの塔たふなど睫まつげを擲こそくる中なかに行ゆき交かふ人は點々てん／＼と蝙蝠かうもりの如ごとく、電車でんしゃは光ひかりながら山椒さんせう魚うをの這はふのに似にて居ゐる。

忘れわすれもしない、眼界がんかいの其その突當つきあたりが、昨夜ゆうべまで、我われあればこそ、電燭でんしよくの宛然さながら水晶宮すいしやうきうの如ごとく輝かざいた劇場げきぢやうであつた。

あゝ、一翳さんの雲くももないのに、緑みどり、紫むらさき、紅くれなゐの旗はたの影かげが、ぱつと空そらを蔽おほふまで、花はなやかに目めに翻ひるがへつた、唯と見みると颯さつと近ちかづいて、眉まゆに近ちかい樹々きゞの枝えだに色鳥いろどりの種々いろ／＼の影かげに映うつつた。

蓋けだし劇場げきぢやうに向むかつて、高たかく翳かざした手ての指環ゆびわの、玉たまの矜ほこりの幻影まぼろしである。

紫玉しぎよくは、瞳ひとみを返かへして、華奢きやしやな指ゆびを、俯向うつむいて視みつゝ

莞爾した。

そして、すら／＼と石橋を前方へ渡つた。それから、森を通る、姿は翠に青ずむまで、靜に落着いて見えたけれど、二ツ三ツ重つた不意の出來事に、心の騒いだのは争はれない。．．．涼傘を置忘れたもの。．．．

森を高く抜けると、三國見霽しの一面の廣場に成る。赫と射る日に、手廂して恁う視むれば、松、櫻、梅いろ／＼樹の状、枝の振の、各自名ある神仙の形を映すのみ。幸ひに可忌い坊主の影は、公園の一木一草をも妨げず。又．．．人の往來ふさへ殆どない。

一處、大池があつて、朱塗の船の、漣に、浮いた汀に、盛装した妙齡の派手な女が、番の鴛鴦の宿るやうに目に留つた。

眞白な顔が、揃つて此方を向いたと思ふと。

「あら、お嬢様。」

「お師匠さん。」

一人が最う、空氣草履の、媚かしい襦袢きで駆けて来る、目鼻は玉江。……最う一人は玉野であつた。

紫玉は故郷へ歸つた氣がした。

「不思議な處で、と言ひたいわね。見ぶつかい。」

「え、観光團。」

「何を惡戯をして居るの、お前さんたち。」

と連立つて寄る、汀に居た玉野の手には、船首へ

掛けつゝ棹があつた。

舷は藍、萌黄の翼で、頭にも尾にも紅を塗つた、鷓首の船の屋形造。玩具のやうだが四五人は乗れる

であらう。

「お嬢様。おめしなさいませんか。」

聞けば、向う岸の、むら萩に庵の見える、船主の料理屋には最う交渉濟で、二人は慰みに、此から漕出さうとする處だつた。．．．お前さんに漕げるかい、と覺束なさに念を押すと、淺くて棹が届く。だから仔細ない。但、一ヶ所底の知れない深水の穴がある。龍の口と稱へて、此處から下の瀧の伏樋に通ずるよし言傳へる、．．．危くはないけれど、其處だけは除けたが可からう、と、．．．こんな事には氣輕な玉江が、つい驅出して仕誼を言ひに行つたのに、料理屋の女中が、わざ／＼出て來て注意をした。

「あれ、彼處ですわ。」と玉野が指す、大池を良の方へ寄る處に、板を浮かせて、小さな御幣が立つて居た。眞中の築洲に鶴ヶ島と言ふのが見えて、祠に龍神を祠ると聞く。．．．鷓首の船は、其の島へ志すのであるから、瀧の口は近寄らないで濟むのであつたが。

「乗らうかね。」  
と紫玉は最う褌を巻くやうに、爪尖を揃へながら、

「でも何だか。」

「あら、何故ですえ。」

「御幣まで立つて警戒をした處があつちやあ、遠くを離れて漕ぐにしても、船頭が船頭だから氣味が悪いもの。」

「否、あの御幣は、そんなおどかしぢやありませんの。不斷は何にもないんださうですけれど、二三日前、誰だか雨乞だと言つて立てたんださうですの、此の早ですから。」

岸をトンと盪すと、屋形船は軽く出た。おや、房州で生れたかと思ふほど、玉野は思つたより巧に棹さす。大池は静である。舷の朱欄干に、指を組んで、頬杖ついた、紫玉の胡紛のやうな肱の下に、萌黄に藍を交へた鳥の翼の揺るゝのが、其處にばかり美しい波の立つ風情に見えつゝ、船はする／＼と滑つて、鶴ヶ島をさして滑かに浮いて行く。

然までの距離はないが、月夜には柳が煙るぐらゐな間で、島へは棹の數百ばかりはあらう。

玉野は上手を遣る。

さす手が五十ばかり進むと、油を敷いたとろりとした静な水も、棹に搔かれて何處ともなしに波紋が起つた、其の所爲であらう。あの底知らずの龍の口とか、日射も其處ばかりはものゝ朦朧として淀むあたり、――微との風もない折から、根なしに浮いた板ながら眞直に立つて居た白い御幣が、スー

スーと少しつゝ位置を轉へて、夢のやうに一寸二寸づゝ動きはじめた。

凝と、……視るに連れて、次第に、緩く、柔に、落着いて、弧を描きつゝ、其の圓い線の合する處で、又スーと、一寸二寸づゝ動出すのが、何となく池を廣く大きく押擴げて、船は遠く、御幣は遙に、不思議に、段々汀を隔るのが心細いやうで、氣も浮かりと、紫玉は、便少ない心持がした。

「大丈夫かい、彼處は渦を卷いて居るやうだがね。」

欄干に頼杖したまゝ、紫玉は御幣を凝視めながら言つた。

「詰りませんわ、少し渦でも卷かなけりや、餘り静で、橋の上を這つてゐるやうですもの、」

とお轉婆の玉江が洒落でもないらしく、  
「玉野さん、船を彼方へ遣つて見ないか？」

紫玉が壓へて、

「不可いよ。」

「否、何ともありやしませんわ。それだし、もしか、船に故障があつたら、おーいと呼ぶか、手を敲けば、すぐに誰か出て来るからつて、女中が然う言つて居たんですから。」とまた玉江が言ふ。

成程、島を越した向う岸の萩の根に、一人乗るほどの小船が見える。中洲の島で、納涼ながら酒宴をする時、母屋から料理を運ぶ通船である。

玉野さへ興に乗つたらしく、

「お嬢様、船を少し廻しますわ。」

「だつて、こんな池で助船でも呼んで覽たが可い、飛んだお笑ひ草で末代までの恥辱ぢやあないか。あれお止しよ。」

と言ふのに、――逆について船がぐいと廻りかけると、ざぶりと波が立つた。其の響きかも知れぬ。小さな御幣の、廻りながら、遠くへ離れて、小さな

浮木ほどに成つて居たのが、ツウと浮いて、板ぐるみ、グイと傾いて、水の面にびたりとついたと思ふと、罔龍の頭、繪ける鬼火の如き一條の脈が、龍の口からむくりと湧いて、水を一文字に、射て疾く、船に近づくと齊しく、波はざツと鳴つた。

女優の船頭は棹を落した。

あれ／＼、其の波頭が忽ち船底を噛むかと思へば、傾く船に三人が聲を殺した。途端に二三尺あとへ引いて、薄波を一煽り、其の形に煽るや否や、人の立つ如く、空へ大なる魚が飛んだ。

瞬間島、の青柳に銀の影が、バツと映して、魚は紫立つたる鱗を、冴えた金色に輝かしく、颯と匆ねたのが、翻然と宙を躍つて、船の中へ堂と落ちた。其時、水がドボンと鳴つた。

船と艦へ、二人はアツと飛退いた。紫玉は欄干に絶つて身を轉はず。

落ちつゝ胴の間で、一跳、跳ねると、其のはずみに、船も動いた。――見事な魚である。

「お嬢様！」

「鯉、鯉、あら、鯉だ。」

と玉江が夢中で手を敲いた。

此の大なる鯉が、尾鰭を曳いた、波の引返すのが棄てた棹を攫つた。棹はひとりでに底知れずの方へツラ／＼と流れて行く。

九

「………太夫様………太夫様。」

偶と紫玉は、宵闇の森の下道で眞暗な大樹巨木の梢を仰いだ。………思ひ掛けず空から呼掛けたやうに聞えたのである。

「一寸燈を、………」

玉野がぶら下げた料理屋の提灯を止めさせて、さし交す枝を透かしつゝ、―――何事と問ふ玉江に、

「誰だか呼んだやうに思ふんだがねえ。」

と言ふ………お師匠さんが、樹の上を視て居るから、

「まあ、そんな處から。」

「然うだねえ。」

紫玉は、はじめて納得したらしく、瞳をそらす時、鬚に手を遣つて、釵に指を觸れた。―――指を觸れた釵は鸚鵡である。

「此が呼んだのか知ら。」

と微酔の目許を花やかに莞爾すると、

「あら、お嬢様。」

「可厭ですよ。」

と仰山に二人が怯えた。女弟子の驚いたのなぞは構はないが、讀者を怯しては不可い。瀧壺へ投沈めた同じ白金の釵が、其の日のうちに再び紫玉の黒髪に戻つた仔細を言はう。

池で、船の中へ鯉が飛込むと、弟子たちが手を拍つ、立騒ぐ聲が響いて、最初は女中が小船で来た。

・ ・ ・ ・ 島へ渡した細綱を手練つて、立ちながら操るのだが、馴れたもので、あとを二押三押、屋形船へ來ると、由を聞き、魚を視て、「まあ、」

と目を二つた切、慌しく引返した。が、間もあらず、今度は印半纏を被た若いものに船を操らせて、亭主らしい年配な法體したのが漕ぎつけて、「これは、太夫様。」亭主も逸早く其を知つて居て、恭しく挨拶をした。浴衣の上だけけれど、紋の着いた薄羽織を引かけて居たが、扨て、「改めて御祝儀を申述べます。目の下二尺三貫目は掛りませう。」

とて、・・・及び腰に覗いて魂消て居る若衆に目配せで頷せて、「恚やうな大魚、然も出世魚と申す鯉魚の、お船へ飛込みましたと言ふは、類希な不思議な祥瑞。おめでたう存じます。皆、太夫様の御人徳。續きましては、手前預りまする池なり、所持の屋形船。烏漕がましようござりますが、従つて手前ども、太夫様の福分、徳分、未會有の御人氣の、はや幾分かおこぼれを頂戴いたしたも同じ儀で、恚やうな心嬉しい事はござりませぬ。尚ほ恚くの通りの早魃、市内は素より近郷鄰國、唯炎の中に悶えまする時、希有の大魚の躍りましたは、甘露、法雨やがて、禽獸草木に到るまでも、雨に蘇生りまする前表かとも存じます。三寶の利益、四方の大慶。太夫様にお祝儀を申上げ、われらとても心祝ひに、此の鯉魚を肴に、祝うて一獻、心ばかりの粗酒を差上げたう存じます。先づ風情はななくとも、あの島影にお船を繋ぎ、涼しく水ものをさしあげて、やがてお席を母屋の方へ移しませう。」で、辭退も會釋もさせず、紋着の法然頭は、最う屋形船の方へ腰を据ゑた。

若衆に取寄せさせた、調度を控へて、島の柳に纜つた頃は、然うでもない、汀の人立を遮るためと、用意の紫の幕を垂れた。「神慮の鯉魚、等閑にはいたしますまい略儀ながら不束な田舎料理の庖丁をお目に掛けまする。」と、ひたりと直つて眞魚箸を構へた。

―― 釵は鯉の腹を光つて出た。―― 龍宮へ往來した釵の玉の鸚鵡である。

「太夫様。―― 太夫様。」

ものを言はうも知れない。――

とばかりで、二聲聞いたやうに思つたゞだけで、何の氣勢もしない。

風も囁かず、公園の暗夜は寂しかった。

「太夫様。」

「太夫様。」

うつかり釵を、又おさへて、

「可厭だ、今度はお前さんたちかい。」

「――水のすぐれ覺ゆるは、

西天竺の白鷺池、

じんじやうきよゆうにすみわたる、

昆明池の水の色、

行末久しく清むとかや。

「お待ち。」

紫玉は耳を澄した。道の露芝、曲水の汀にして、

さら／＼と音する流の底に、聞きも知らぬ三味線の、

沈んだ、陰氣な調子に合せて、微に唄ふ聲がする。

「――坊さんではないか知ら……」

紫玉は胸が轟いた。

あの漂泊の藝人は、鯉魚の神祕を視た紫玉の身に  
は、最早や、うみ汁の如く、唾、涎の臭い乞食坊主  
のみではなかつたのである。

「あの、三味線は、」

夜陰やいんのこんな場所ばしよで、もしや、と思ふ時おもとき、掻消えかきるやうに音が止やんで、ひた／＼と小石こいしを潜くつて響ひびく水みづは、忍しのぶ聲音あしおとのやうに聞きえる。

紫玉しぎよくは立留たちどまつた。

再びふたたび、名なもきかぬ三味線しやみせんの音が陰々いんくとして響ひびくと、  
ー 日本にっぽんにて候まをぞと申まをしける。鎌倉殿かまくらどのこ  
と／＼しや、何處いづこにて舞まひて日本にっぽんとは申まをしける  
ぞ。梶原かぢはら申まをしけるは、

一歳ひととせ百日ひゃくじつの早はやの候まをひけるに、賀茂川かもがは、桂川かつらがは、水みな  
瀬せ切きれて流ながれず、筒井つづみの水みづも絶たえて、國土こくどの惱なやみ  
にて候まをひけるに、ー

聞きくものは耳みみを澄すまして袖そでを合あはせたのである。

ー 有驗うげんの高僧かうそう貴僧きそう百人にん、神泉苑しんせんえんの池いけにて、  
仁王經にんわうきやうを講かうじ奉たてまうらば、八大龍主だいろわうも慈現じげん納受なふじゆたれ給たまふ  
べし、と申まをしけ

れば、百人にんの高僧かうそう貴僧きそうを請しやうじ、仁王經にんわうきやうを講かうぜら  
れしかども、其驗そのしるしもなかりけり。又また或人あるひと申まをしけるは、  
容顔ようがん美麗びれいな

る白拍子を、百人めして、――

「御坊様。」

今は疑ふべき心も失せて、御坊様、と呼びつゝ、  
紫玉が暗中を透して、聲する方に  
絶るやうに寄ると思ふと、

「燈を消せ。」

と、荒びたが力ある聲して言つた

「提灯を

「は、」と、返事と息を、はッはッとはずませ  
ながら、一度消損ねて、慌しげに吹消した。玉野の  
手は震へて居た。

――百人の白拍子をして舞はせられしに、  
九十九人舞ひたりしに、其驗もなかりけり。静一人  
舞ひたりとても、

龍神示現あるべきか。内侍所に召されて、禄お  
もきものにて候にと申したりければ、とても人数な  
れば、唯舞は

せよと仰せ下されければ、静が舞ひたりけるに、  
しんむしやうの曲と言ふ白拍子を、  
――

燈を消すと、あたりが却つて朦朧と、薄く鼠色に  
仄めく向うに、石の反橋の欄干に、僧形の墨の法衣、  
灰色に成つて、蹲るか、と視れば欄干に胡坐搔いて  
唄ふ。

橋は心覚えのある石橋の巖組である。氣が着けば、  
あの、かくれ瀧の音は遠くだう／＼と鳴つて、風の  
如くに響くが、掠れるほどの絲の音も亂れず、唇を  
合すばかり唄も遮られず、嵐の下の蟲の聲。が、形  
は著しいものではない、胸をくしゃ／＼と折つて、  
坊主頭を、がく、と俯向けて唄ふので、頸を抽いた  
轉進に掛る手つきは、鬼が角を弾くと言はゞ嚴めし  
い、寧ろ黒猫が居て顔を洗ふと言ふのに適する。

―― なから舞ひたりしに、御輿の嶽、愛宕山  
の方より黒雲俄に出来て、洛中にかゝると見えけれ  
ば、  
――

と唄ふ。……紫玉は腰を折つて地に低く居て、弟子は、其の背後に蹲んだ。

——八大龍王鳴渡りて、稻妻ひらめきしに、諸人目を驚かし、三日の洪水を流し、國土安穩なりければ、切こそ

靜の舞に示現ありけるとて、日本一と宣言を給りけると承り候。——

時に唄を留めて黙つた。

「太夫様。」

餘り尋常な、ものいひだつたが、

「は、」と、呼吸をひいて答へた紫玉の、身動きに、帯がキと擦れて鳴つたほど、深く身に響いて聞いたのである。

「癩坊主が、ねだり言を肯うて、千金の釵を棄てられた。其の心操に感じて、些細ながら、禮心に密と内證の事を申す。貴女、雨乞をなさるが可い。」

―― 天の時、地の利、人の和、まさしく時節ぢ  
や。―― ころの大池の中洲の島に、かりの法壇  
を設けて、雨を祈ると觸れてな。……袴、練  
衣、烏帽子、狩衣、白拍子の姿が可からう。衆人め  
ぐり見る中へ、其の姿をあゝの島の柳の上へ高く顯し、  
大空に向つて拜をされい。祭文にも歌にも及ばぬ。  
天龍、雲を遣り、雷を放ち、雨を漲らすは、明午を  
過ぎて申の上刻に分毫も相違ない。國境の山、赤く、  
黄に、峰嶽を重ねて爛れた奥に、白蓮の花、玉の掌  
ほどに白く聳えたのは、四時に雪を頂いて幾萬年の  
白山ぢや。貴女、時を計つて、其の鸚鵡の釵を抜い  
て、山の其方に向つて翳すを合圖に、雲は龍の如く  
湧いて出よう。―― 尚ほ其の上に、可いか、名  
を擧げられい。

―― 賢人の釣りを垂れしは、

嚴陵瀨の河の水。

月影ながらもる夏は、

山田の笥の水とかや――

翌日の午後の公園は、炎天の下に雲よりは早く黒く成つて人が湧いた。煉瓦を羽蟻で包んだやうな凄じい群集である。

かりに、鎌倉殿として置かう。此の××縣に成上の豪族、色好みの男爵で、面構も風采も巨頭公に良肖たのが、劇興行はじめから他に手を貸さないで紫玉を鼻肩した。既に昨夜も或處で一所に成る約束があつた。其の間の時間を、紫玉は微行したのである。が、思ひも掛けない出来事のために、大分の隙入をしたものゝ、船に飛んだ鯉は、其のよしを言づけて初穂と言ふのを、氷詰めにして、紫玉から鎌倉殿へ使を走らせたほどなのであつた。――

車の通ずる處までは、最う自動車が出来待つて居て、やがて、相會すると、或時間までは附添つて差支へない女弟子の口から、眞先に豫言者の不思議が漏れた。

一議に及ばぬ。

其の夜のうちに、池の島へ足代を組んで、朝は早  
や法壇が調つた。無論、略式である。

縣杜の神官に、故實の詳しいのがあつて、神燈を  
調へ、供饌を捧げた。

島には鎌倉殿の定紋ついた帷幕を引繞らして、威  
儀を正した夥多の神官が詰めた。紫玉は、さきほど  
からこゝに控へたのである。

あの、底知れずの水に浮いた御幣は、やがて壇に  
登るべき立女形に對して目觸りだ、と逸早く取退け  
させ、樹立さしいで、蔭ある水に、例の鷓首の船を  
泛べて、半ば紫の幕を絞つた裡には、鎌倉殿をはじ  
め、客分として、縣の顯官、勲位の人々が、杯を置  
いて籠つた。――雨乞に參ずるのに、杯をめぐ  
らすと言ふ故實は聞かぬが、しかし事實である。

伶人の奏樂一順して、ヒユウと簫の音の虚空に響  
く時、柳の葉にちら／＼と緋の袴がかつた。

群集は波を揉んで動搖を打つた。

あれに眞白な足が、と疑ふ、緋の袴は一段、階に割られて、二條の紅の霞を曳きつゝ、上紫に下萌黄なる、蝶鳥の刺繍の狩衣は、緑に透き、葉に靡いて、柳の中を、する／＼と、容顔美麗なる白拍子。紫玉は、色ある月の風情して、一千の花の燈の影、百を數ふる雪の供饌に向うて法壇の正面にすらりと立つ。

花火の中から、天女が斜に流れて出ても、群集は此の時くらゐ驚異の念は起すまい。

烏帽子もともに此の装束は、織ものゝ模範、美術の表品、源平時代の参考として、嘗て博覽會にも飾られた、鎌倉殿が秘藏の、いづれ什物であつた。

扨て、遺憾ながら、此の晴の舞臺に於て、紫玉のために記すべき振事は更でない。渠は學校出の女優である。

が、姿が天より天降つた妙に艶なる乙女の如く、國を圍める、其の赤く黄に爛れたる峰嶽を貫いて高

く柳の間に懸つた紫玉は恭しく三たび虚空を拜した。

時に、宮妓の装した白丁の下男が一人、露店の飴屋が張りさうな、澁の大傘を疊んで肩にかついだのが、法壇の根に顯れた。――此は怪しからず、天津乙女の威嚴と、場面の神聖を害つて、何うやら華魁の道中じみだし、雨乞には些と行過ぎたものゝやうだつた。が、何、降るものと極れば、雨具の用意をするのは賢い。……加ふるに、紫玉が被いだ装束は、貴重なる寶物であるから、驚破と言はざさし掛けて濡らすまいための、鎌倉殿の内意であつた。

――然ればこそ、此のくらゐ、注意の役に立つたのはあるまい。――

あはれ、身のおき處がなく成つて、紫玉の裾が法壇に崩れた時、「状を見る。」「や、身を投げろ。」「飛込め。」――わつと群集の騒いだ時、……堪らぬ、と飛上つて、紫玉を壓へて、生命を取留めたのも此の下男で、同時に狩衣

を剥はぎ、緋ひの袴はかまの紐ひもを引解ひきほどいたのも――鎌倉かまくら殿どの  
のためには敏捷びんせふな、忠義ちうぎな奴やつで――此この下男げなんで  
ある。

雨あめはもとより、風かぜどころか、餘あまの人出ひとでに、大池おほいけに  
は蜻蛉とんぼも飛とばなかつた。

時を見、程を計つて、紫玉は始め、實は法壇に立つて、數萬の群集を足許に低き波の如く見下しつゝ、昨日通つた坂にさへ蟻の傳ふに似て押覆す人數を望みつゝ、徐に雪の頤に結んだ紫の纓を解いて、結目を胸に、烏帽子を背に掛けた。

其から伯爵の釵を抜いて、意氣込んで一振り振ると、……黒髪の颯と捌けたのが烏帽子の金に裏透いて、宛然金屏風に名譽の繪師の、松風を墨で流したやうで、雲も龍も其處から湧く、かと視められた。——此だけは工夫した女優の所作で、手には白金がヒ首の如く輝いて、凄艶比類なき風情であつた。

さて其の鸚鵡を空に翳した。

紫玉の二つた瞳には、確に天際の僻邊に、美女の掌に似た、白山は、白く清く映つたのである。

毛筋ほどの雲も見えぬ。

雨乞の雨は、いづれ後刻の事にして、其のまゝ壇を降つたらば無事だつたらう。處が、遠雷の音でも聞かすか、暗轉に成らなければ、舞臺に馴れた女優だけに幕が切れない。紫玉は、しかし、目前鯉魚の神異を見た、怪しき僧の暗示と讖言を信じたのであるから、今にも一片の雲は法衣の袖のやうに白山の眉に翻るであらうと信じて、須臾を待つ間を、法壇を二廻り三廻り緋の袴して輪に歩行いた。が、此は鎮守の神巫に似て、然もなんばと言ふ足どりで、少なからず威嚴を損じた。

群集の思はんほども憚られて、腋の下に衝と冷き汗を覺えたのこそ、天人の五衰のはじめとも言はう。

氣をかへて屹と成つて、もの忘れした後見に烈しくきつかけを渡す状に、紫玉は虚空に向つて伯爵の鸚鵡を投げた。が、あの玩具の竹蜻蛉のやうに、晃々と高く舞つた。

「大神樂！」

と喚いたのが第一番の半疊で。

一人口火を切つたから堪らない。練馬大根と言ふ、おかめと喚く、雲の内侍と呼ぶ、雨しよぼを踊れ、と怒鳴る。水の輪の擴がり、嵐の狂ふ如く、聞くも堪へない讒謗罵詈訾は雷の如く哄と沸く。

鎌倉殿は、船中に於て嚇怒した。寵愛せる女優のために群集の無禮を憤つたのかと思ふと、——然うではない。這般好色の豪族は、疾く雨乞の驗なしと見て取ると、日の昨の、短夜もはや半ばなりし紗の蚊帳の裡を想ひ出した。・・・

雨乞のためとて、精進潔齋させられたのであるから。

「漕げ。」

紫幕の船は、矢を射るやうに島へ走る。

一度、駈下りようとした紫玉の緋裳は、此の船の激しく襲つたゝめに、一度引留められたものである。

「  
」

と喚く鎌倉殿の、何やら太い聲に、最初、白丁に  
豆烏帽子で傘を擔いだ宮奴は、島のなる幕の下を這  
つて、又いと面を出した。

すぐに此奴が法壇へ飛上つた、其の疾さ。

紫玉が最早、と思ひ切つて池に飛ばうとする處を、

壓へて、そして剥いだ。

女の身としてあられうか。

あの、雪を束ねた白いものゝ、壇の上にひれ伏し  
た、あはれな状は、月を祭る供物に似て、非ず、早  
魘の鬼一口の犠牲である。

ヒイと聲を揚げて弟子が二人、幕の内、手放し  
にわつと泣いた。

赤ら顔の大入道の、首抜きの浴衣の尻を、引めく  
つたのが、苦り切つたる顔して、つか／＼と、階を  
踏んで上つた、金方か何ぞであらう、芝居もので。

肩を無手と取ると、

「何だ、状は。小町や静ぢやあるめえし、増長を  
しやがるからだ。」

手の裏かへす無情さは、足も手もぐたりとした、  
烈日に裂けかゝる氷のやうな練絹の、紫玉の、ふく  
よかな胸を、酒焼の胸に引摺み、毛脛に挟んで、

「立たねえかい。」

「口惜しい！」

紫玉は舷に縋つて身を震はす。――眞夜中の

月の大池に、影の沈める樹の中に、しばめる睡蓮の如く漾ひつゝ。

「口惜しいねえ。」

車馬の通行を止めた場所とて、人目の恥に歩行み

も成らず、――金方の計らひで、――萬松

亭と言ふ汀なる料理店に、とに角引籠る事にした。

紫玉は唯引被いで打伏した。が、金方は油断せず。

弟子たちにも旨を含めた。で、次場所の興行恸くて

は面白がるまいと、やけ酒を煽つて居たが、酔倒れ

て、其は寐た。

料理店の、あの亭主は、心優しいもので、起居にい

たはりつ、慰めつ、で、此も注意はしたらしいが、

深更の然も夏の夜の戸鎖浅ければ、伊達巻の跣足で

忍んで出る隙は多かつた。

生命の惜からぬ身には、操るまでの造作も要らぬ。  
小さな通船は、胸の悩みに、身もだえするまゝに播  
動いて、萎れつゝ、亂れつゝ、根を絶えた小船の花  
の面影は、晝の空とは世をかへて、皓々として雫す  
る月の露吸ふ力もない。

「えゝ、口惜しい。」

亂れがみを雀りつゝ、手で、砕けよ、と八々と舷  
を打つと・・・時の間に瘦せた指は細く成つて、  
右の手の四つの指環は明星に擬へた金剛石のをはじ  
め、紅玉も、綠寶玉も、スルリと抜けて、きら／＼  
と、薄紅に、淺緑に皆水に落ちた。

何うでもなれ、左を試みに振ると、青玉も黄玉も、  
眞珠もともに、月の美しい影を輪にして沈む・・・  
・・・龍の口は、水の輪に舞ふ處である。

こゝに残るは、名なれば其を誇として、指にも  
髪にも飾らなかつた、紫の玉唯一つ。――紫玉  
は、中高な顔に、深く月影に透かして差覗いて、千  
尋の淵の水底に、いま落ちた玉の緑に似た、門と柱

と、欄干と、あれ、森の梢の白鷺の影さへ宿る、櫓  
と、窓と、樓と、美しい住家を視た。

「ぬしにも成つて、此、此の田舎のものども。」  
「継る波に力あり、しかと引いて水を掴んで、池に  
倒に身を投じた。爪尖の沈むのが、釵の鸚鵡の白く  
羽うつが如く、月光に微に光つた。」

「御坊様、貴方は？」

「あゝ、山國の門附藝人、誇れば、魔法つかひと  
言ひたいが、いかな、然までの事も無い。昨日から  
御目に掛けた、あれは手品ぢや。」

坊主は、欄干に擬ふ苔蒸した井桁に、破法衣の腰  
を掛けて、居けるが如く爛々として眼の輝く青銅の  
龍の蟠れる、角の枝に、肱を安らかに笑みつゝ言つ  
た。

「私に、何のお怨みで？・・・」

と息せくと、眇の、ふやけた目珠ぐるみ、片頬を

掌たなこでさし蔽おほうて、

「いや、邊境へんきやうのものは氣きが狭せまい。貴方あなたが餘あまり目覺めざましい人氣にんきゆゑに、恥入はぢいるか、もの嫉ねたみをして、前藝まへげいを一寸遣ちよつとつた。……さて時ときに承うけたまはるが太夫たいふ、貴女あなたは其それだけの御身ごみぶん分ぶん、それだけの藝げいの力ちからで、人ひとが兩乞あまごひをせよ、と言いはゞ、すぐに優伎わざおぎの舞臺ぶたいに出でて、小町こまちも靜しづかも勤つとめるのかな。」

紫玉しぎよくは巖いはやに俯向うつむいた。

「其それで通とほるか、いや、さて、都みやこは氣きが廣ひろい。――  
われらの手品てじなは何どうぢやらう。」

「えゝ、」  
と仰あふいで顔かほを視みた時とき、紫玉しぎよくはゾツと身みに沁しみた、腐くされた坊主ばうずに不ふ思議しぎな戀こひを知しつたのである。

「貴方あなたなら、貴方あなたなら――何故なぜ、さすらうて  
おいで遊あそばす。」

坊主ばうずは兩手りやうてで顔かほを壓おへた。

「面目ない、われら、此處に、高い貴い處に戀人がおはしてな、雲霧を隔てゝも、其の御足許は動かれぬ。呀！」

と、慌しく身を退ると、呆れ顔してハツと手を墮げて立つた。

髪黒く、色雪の如く、厳しく正しく艶に氣高き貴女の、繕はぬ姿したのが、ずらりと入った。月を頸に掛けつと見えたが、眞白な涼傘であつた。

膝と胸を立てた紫玉を、ちらりと御覽ずると、白やかなる指尖を軽く、彼が肩に置いて、

「私を打つたね。――雨と水の世話をしに出て居た時、」

装は違つた、が、幻の目にも、面影は、浦安の宮、石の手水鉢の稚兒に、寸分のかはりはない。

「姫様、貴女は。」

と坊主が言つた。

「白山へ歸る。」

あゝ、其の劍ヶ峰の雪の池には、龍女の姫神おは  
します。

「お馬。」

と坊主が呼ぶと、スツと疊んで、貴女が地に落し  
た涼傘は、身震をしてむくと起きた。手まさぐり給  
へる緋の總は、忽ち紅の手綱に捌けて、朱の鞍置い  
た白の神馬。

ずつと騎すのを、轡頭を曳いて、トトトトー  
と坊主が出たが、  
「纏頭をするぞ。それ、錦を着て行け。」

かなぐり脱いだ法衣を投げると、素裸の坊主が、  
馬に、ひたと添ひ、紺碧なる巖の峙つ岨を、翡翠の  
階子に乗るやうに、貴女は馬上にひらりと飛ぶと、  
天か、地か、渺茫たる曠野の中をタタタタと蹄の音  
響。

蹄を流れて雲が漲る。

身を投じた紫玉の助かつて居たのは、靈澤金水の、

巖<sup>がんくつ</sup>屈<sup>おく</sup>の奥<sup>おく</sup>である。うしろは五十萬坪<sup>つぼ</sup>と稱<sup>とな</sup>ふる練兵場<sup>れんべいぢやう</sup>。  
紫玉<sup>しぎよく</sup>が、たゞ沈<sup>しづ</sup>んだ水底<sup>みなそこ</sup>と思<sup>おも</sup>つたのは、天地<sup>てんち</sup>を靜<sup>しづ</sup>  
めて、車軸<sup>しゃぢく</sup>を流<sup>なが</sup>す豪雨<sup>がうう</sup>であつた。――

雨<sup>あめ</sup>を得<sup>え</sup>た市民<sup>しみん</sup>が、白身<sup>はくしん</sup>に破法衣<sup>やれごろも</sup>した女優<sup>ぢよいう</sup>の藝<sup>げい</sup>の徳<sup>とく</sup>  
に對<sup>たい</sup>する新<sup>あら</sup>たなる渴仰<sup>かつがう</sup>の光景<sup>やうす</sup>が見<sup>み</sup>せたい。

【完】